



日常臨床の知恵の結集

評者 青木 眞
感染症コンサルタント



総合内科マニュアル 第2版

八重樫牧人、佐藤暁幸＝監修
亀田総合病院＝編

定価: 3,080 円
三五変型・520 頁／医学書院／2021
[ISBN978-4-260-03658-0]

「時間がないので長文になりました」とは、「そぎ落とす」ことが本質ということなのだろうで症例をプレゼンさせることがある。面白い医に症例の本質が見えてくるから不思議なも

れた、それゆえに極めて中身の濃いマニュアルとなっている。「(総合内科の) 大多数のCOMMONな問題に世界標準の質で診療ができるようにまとめた」という本書の一部を、本文を引用しながらご紹介しようと思う。

第1章「患者ケアの目標設定」:「目標設定はきわめて重要(中略)。目標を設定し、そこから逆算して手段が導き出される。(中略) 手段を目的化してはならない。(中略) 最大の目標は『患者のニーズ』に答えることである。(中略) 隠れたニーズも(中略) プロとして積極的にこれを掘り起こす必要がある(例: 閉経後女性の骨密度測定、肺炎球菌ワクチン)」(本書 p.1)。「アセスメントと行動の一貫性を保つ」(p.2)。「入院初日に退院までの流れを想定する」(p.3)。

第2章「病歴聴取」:「チェックリストではなく、ストーリー作りである。すべての情報は断片ではなく、ストーリーの一要素として考える」(p.8)→病歴聴取の本質である。「常に診断仮説は立てること。なんとなく話を聞いてはいけけない。仮説から逆算して、病歴をさらにとる」(p.9)→鑑別診断の繰り返しは内科診療の本質。第1・2章のような内容を書かせると、岩田健太郎先生は本当に光る。

第5章「医師指示・カルテ記載」:「毎日の見直すべき項目①静脈ラインを抜去できるか。②モニターをはずすことができるか。③経静脈薬を経口薬へ変更できるか。④尿道カテーテルを抜去できるか。(中略) ⑥患者の安静度/活動度を増やせるか。(中略) ⑨退院計画の状況」(p.38)→これを臨床現場の脊髄反射としたい。

第9章「一般外来診療の原則」:「外来で評価すべき患者の3領域: disease (疾患)を医学的に評価し、illness (病体験)から患者の考えを汲み取り、health (健康観)に目標を見つける。(中略) (health は) 身体状況や社会生活で『こうであれば満足』と思える状態であり、必ずしも『病気がないこと』ではない」(p.62~63)。「終末医療から『end of life care』へ: およその余命は、癌: 45 日、脳血管障害: 1300 日」(p.78)→亀田総合病院の家庭医学領域の広さ・高さ・深さ…。

第13章「集中治療の原則」:「③循環: 血管内ボリュームの評価は難しい。(中略) 機能的パラメータが有用な指標になりうる」(p.97)→亀田総合病院は、集中治療室に集中治療の専門家がいて極めてユニーク。

第15章「疼痛緩和の原則」:「疼痛コントロールは臨床家すべての義務である。(中略) 痛みは5番目のバイタルサイン。痛みがあるかどうか聞く習慣をつける」(p.114)→同ページの「WHO がん疼痛治療の5原則」も重要。「進行がん患者にオピオイド開始時に説明すべきこと」(p.117)も素晴らしい。

第17章「感染症」:「2019年のIDSAのガイドラインでは、喀痰のグラム染色や血液培養は不要であるとされているが、亀田総合病院ではよりレベルの高い診療をめざしており」(p.149)→ベッドサイドにすべてを捧げた臨床家のみが書ける素晴らしい骨太の章。涙、そして拍手!

第19~29章にまとめられた「循環器」「神経」「消化器」「腎・水・電解質」「内分泌疾患(糖尿病を含む)」「血液」「腫瘍」「アレルギー」「リウマチ・膠原病」「皮膚」「精神」の各章→これらの章にも臨床のパールが目白押し。付箋・マーカーによるハイライトだらけに。

第30章「女性の健康」、第31章「男性の健康」、第32章「ヘルスマンテナンス(健康増進)と予防」:「常にヘルスマンテナンスを考慮した診療を心がける。診療録のプロブレムリストにヘルスマンテナンスの項目を記載するとよい。外来では継続性の利点を活かしヘルスマンテナンスを行う」(p.468)→「総合内科マニュアル」がこのような章立てで整理されること自体が素晴らしいと思う。

もはやご存じない方が多いと思うが、四半世紀ほど前、日本に総合診療の文化を伝えた Gerald Stein 先生は亀田総合病院におられた。彼に薫陶を受けた若手医師が現在、日本の各地の総合診療領域で活躍されている。本書の監修者のお1人である八重樫先生、沖縄県立中部病院の金城紀与史・光代ご夫妻、徳洲会グループの Joel Branch 先生など枚挙に暇がない。“cookbook”と揶揄されることもある「マニュアル」だが、一見何気ない日常臨床の知恵が集積されると、かくも素晴らしいものができあがる好例として、本書を多くの研修医・指導医に薦めたい。

⑥